大鹿スケッチ

— 第34号 —

2013年 8月

〈 発信者 〉
前満島 くみ

〈 提供 〉
旅舎 右馬允

日中はまだ蝉の鳴き声が元気で気温もそこそこあがります。しかし時折吹くひんやりとした爽やかな風に季節の移ろいを感じます。近くの山を眺めると木々の葉が少し黄色味を帯びている様子が伺えます。雨もここのところまとまって降っており、山のきのこへの期待感が高まります。松茸、雑キノコ予報担当の正介さんによりますと、今年は「良」という予測が出ております…が、期待半分、冗談半分くらいでご理解ください。結局は、自然の微妙なバランスのなかで受け取れたり、受け取れなかったりするものなのですから。さて、今シーズンはどうなることでしょう。どちらにしても右馬允のお食事でご確認いただければ幸いです。右馬允スタッフ一同お待ち申し上げます。

七月の稜線暮らし
聖岳～光岳編 ②
だらだら読み切り

七月二十一日から三泊四日の日程で聖岳から光岳への縦走を行いました。その記録です。前回からのつづき。

二十二日早朝、聖平小屋から聖岳をデポして上河内岳、茶臼小屋泊。奥聖岳で出会った雷鳥の親子に見送られ、聖平小屋着九時二十分。山の独りきりとガスと強風。縦走道かってみたり。また縦走道の両脇に門のようにそそり立つチャーマンティックに演出されてくわくしました。美しい縞模様。暑さ一センチで十五万年の年月をかけて形成されたものだといいます。陸から砂や泥が運ばれてこない遠洋でホウサンチュウの死骸が堆積してできた生物由来の岩石です。さながら海底散歩。お花畑は見通しがきかず通り過ぎましたが一株、クロユリを確認することができました。茶臼小屋着午後二時四三分。いそいそとテントを張ります。しかし強風と雨で難航。周りの人たちのはり方を見ながらなんとか設営。飛ばされてしまうのではと、びくびくしながらシュラフに入ってしまいましたがいつの間にかぐっすり。三日目、茶臼小屋から光岳へ。茶臼岳、仁田岳、易老岳、イザルガ岳経由。朝も風が残りましたが雨は止み、富士山が望めました。山小屋の前にはちょうどいい高さに手すりがあり、富士山を正面に望みながらのストレッチ。茶臼小屋発五時二〇分。早朝の稜線歩きは気分がいい、三〇分もすれば茶臼岳山頂。このあたりはピンク色のかわいらしいタカネバラが咲いていました。生息する場所を選ぶ植物らしく、今回の稜線ではここでしか見られませんでした。一番ロマンティックに演出されていた山頂でした。ここからの稜線はカンバとハイマツの混成。花畑もあり池もある緩やかで心地のよい道のりでや泥が運ばれてこない遠洋す。ストレッチするように足でホウサンチュウの死骸がを運ばせました。八時四五分に易老岳を通過し、三吉平でブランチ。ここからが長く感じました。樹林帯をしばらく歩き、登ったり下ったりを繰り返し、やっと登れるとおもったらガレ場を行きます。光岳はなかなか登らせてくれない山です。登りきると静高平。平らな草原地です。光小屋が見えると少し余裕もでイザルガ岳にデポ。ガスで見通しが悪かったものの今日のルートがよく臨め、気持ちのいい山頂でした。光小屋着一二時三〇分。テント設営をしてから光岳、光岩まで。山頂は林の中で感動をかきますが、山頂から下っていくと忽然と現れる光岩！思わず歓声！周りに人がいなくてよかった…。麓からみると石灰に光があたってキラキラして見えるので光岳（てか石灰岩でしか見えない）と名付けられたということが納得。大きくて立派な石灰岩です。岩の間からミヤマムラサキが無数に咲き誇ります。そんなメルヘンな石灰岩地でコーヒーをいれてしばしゆっくり、良いひとときでした。（つづく）

朝食2回目をとりました。聖岳の山頂ではキレイな青空が広がっていましたが徐々に雲が広がり始めているのが気になります。少し焦りながらの出発九時四五分。しばらく樹林帯を行きますがいいタイミングで道の印象が変わる楽しい道のり。カンバの根っこがうねうねしているところがあったり、しばらく平地がつづいたり、草地では可憐な印象のツマトリソウが山道を演出してくれています。気付くと稜線歩き。南岳二七〇二m十一時四十三分。ここでお昼、サンドイッチを作ってみました。しばらくは緩やかな稜線が続きますが最後はガレのでこぼこ道を登ります。登ら片道一〇分ほどで上河内の山頂二八〇三mです。午後一時四三分着しかし見通しゼロ。早々に引き返し、茶臼小屋を目指します。稜線鞍部（山岳言葉ではコル）は風が強く吹き抜けはいっていましたが濡れます。装備を整え再び歩きこだします。このあたりはチャートの岩の塊が所々に出現するのですが、強風とガスの演出でより幻想的。賽の河原を歩いたらこんな感じかな…などと思ったり。縦走道の両脇に門のようにそそり立つチャートの岩「竹内門」の褶曲にわ

大鹿 HeatBeat
～大鹿の人々～ 第30回
紙谷 正 さん（87）

このコーナーでは、季節ごとの風景と共に大鹿人の生活をご紹介します。淡々とした日々の中に熱く響く「鼓動」をお届けします。

紙谷さんの畑ではお盆が明けた頃にサトイモのいをかり、（土もりのこと）約一カ月ぶりに雨が降った二十四日に種まきをしました。夏真っ盛りに蒔いたホウレンソウのは今、大根の芽と一緒にかわいらしい双葉をみせてくれています。ホウレンソウは十五℃ほどの気温が続かないと発芽しないらしく、やはりしっかりと気温が下がった頃、潮時に大地から顔をだします。紙谷さんは「条件がちゃんと整ったところをみはからって出てくるんだで、えらい（賢い）もんだ」と感心してしまり毎朝、桑づけをしてから野菜が育つ畝を入念に見て回ります。稲刈り前の田んぼでは一足先にヒエが実りの秋を迎えています。立ち向かう紙谷さんは毎日、空いた時間ができるとヒエ取りに奔走します。最後まであきらめません。

今年のごくごく個人的な流行語に「稜線族」がノミネートされている。ロングトレールブームが到来したのだ。中高年の世代でも三泊四日は当たり前、大学生になると十日間の日程を組んで歩いている一行もいる。山小屋のスタッフの方にもきいてみたが今年の夏はテント泊が多く、テン場がパンク気味だったという日も少なくないそうだ。七十代くらいだろうか、老夫婦もテントを担いでいる。果たして自分自身がその年になって登ってみるとこころでは、一泊、一泊、重ねるうちに本当にそんなことがふと頭をよぎる。登山よりもロングトレールが人気になったのは山岳アイテムの軽量化、レトルト食品の充実など予測がつく。実際に体で感じる感じがある。一日の様子。二十九日からは秋蚕も始まり毎朝、桑づけをしてから冬野菜が育つ畝を入念に見て回ります。稲刈り前の田んぼでは稜線の風景と赤石山脈の多彩な地形に足の裏と脳が同時に刺激を受けている感じ。そんなこんなで「稜線族」が続々と生まれているのだとおもう。